

2001.7

岡村昭彦の会

NO.11

ベトナム、インドシナ戦争報道の生き証人

フォトジャーナリスト・石川文洋氏をお迎えして

第16回AKIHIKOの会開催

二十一世紀を迎えたこの春、岡村昭彦が亡くなって十六年。毎年、岡村昭彦の命日にちなんで開かれている「AKIHIKOの会」が、今年も三月十八日に、東京神楽坂・日本出版クラブ会館で開催されました。

昨年はベトナム戦争終結二十五周年で、戦後始めて米大統領クリントンがベトナムを訪問するなど、かつて世界を揺るがせたアジアの戦争が様々な視点から回顧されました。



1963年頃の岡村昭彦

国際報道写真家としての生涯を送った岡村昭彦のスタートはベトナム戦争でした。一九六三年サイゴンの地を踏んで以来、テロやクーデターに遭遇し、各地の戦場で〈未知の戦争〉の現実と悲劇を目撃してきたのです。のちに岡村のライフワークとなるアイルランドやホスピスへたどりつくきっかけもこのベトナムの経験からでした。

そこで今年の「AKIHIKOの会」は、ベトナム戦争の初期の頃からニュース映画カメラマンとして、のちにはフリーランスカメラマンとして死線をくぐり、生還してきたフォトジャーナリスト石川文洋氏に記念講演をお願いしました。

題して「ベトナム報道三十六年」。石川さんは一〇〇枚にものぼる貴重なスライドを使いながら、二十世紀のベトナム、インドシナの戦争報道の生き証人として、フアインダーを通してのベトナムをお話くださいました。石川さんは一九六四年にサイゴンで岡村とも出会っており、その時の様子なども含めて、貴重な体験を伺うことが出来ました。講演に先立ち当会の中川道夫氏が、昨年岡村ゆかりの地を訪ねたスライドによるベトナムリポートを行いました。

参加者は六十七名。第二部懇親会では石川さんを囲んで楽しい会となりました。

ベトナム報道三十六年

石川文洋

(報道カメラマン)

私はどうしてベトナムへ行ったのか

期の頃は、松竹、東映、日活など六社も製作会社がありました。

毎日映画社は「日活世界ニュース」をつくって入社しました。一九五九年です。その翌年が六十年安保の年です。安保の時は、連日デモの取材に行きました。

樺美智子さんが亡くなったときもすぐ近くにいましたし、当時、社会党書記長の浅沼稲次郎さんが刺された時も病院へ飛んで行きました。今でもあのときの情景が目に残ります。江田三郎さんが日比谷公園横にある病院の玄関から出てきて「いま浅沼さんが亡くなりました」といった言葉を思い出します。

世界一周無銭旅行への出発

安保闘争を取材して、それから三年ぐらい毎日映画社で仕事をしていました。あこがれの職場ではあったのですが、そこを辞めて世界一周無銭旅行に行こうと思ったのです。

当時日本は貧乏だったので、観光目的ではパスポートが下りなかつたんです。海外旅行



戦場カメラマン 石川文洋

朝日文庫「戦場カメラマン」より

私がどうしてベトナムに関わるようになったのか、お話ししたいと思います。

私が最初にベトナムに行ったのは一九六四年の八月、アメリカがはじめて北ベトナムを爆撃した「トンキン湾事件」の直後でした。私は初めからベトナムに行くつもりはなかつたのです。

私は日本を出る前まで、毎日映画社というところにいました。ここはニュース映画やテレビニュースをつくっているところです。

昔、テレビのない時代、映画館で劇映画を上映する前に、十分ぐらいニュース映画を上映していました。テレビが家庭にゆきわたっていないその当時は映画は人気があり、全盛

というのは夢のまた夢の時代でした。観光目的でパスポートが取れるようになったのは一九六四年の四月からです。

当時三百ドルのワクを取るのでも、日銀の外貨審議委員会という、通産省、大蔵省、外務省の委員で成り立っている委員会に申請をして、研究、国際会議、留学、そういう理由がなければ承認されなかつたのです。その証明書を持って外務省に行き、パスポートを申請したものでした。

日本を出てみたい、広い世界を見てみたいこれは昔も今も若者のエネルギーです。

私の場合は、一九六四年四月に日本を出るのですが、最終の目的地はアメリカでした。当時貧乏国だった日本人にとってアメリカはあこがれの地でした。アメリカへ行って便所掃除でも、皿洗いでも、何でもいいから働きながら、英語を勉強して何か自分のものを見つけない、そう思っていました。

当時無銭旅行がはやっていました。堀江謙一さんはヨットで太平洋を横断した。あの人にはパスポートも持たずに行つたのです。私は堀江謙一さんに刺激を受けました。しかし全くとお金がありません。貨物船に乗ってアメリカへ行けないかと考えて、友人に英語で書いてもらって、横浜で貨物船の船員に見せたのですが、彼らはそれを見て、何か言うのです。何を言っているのか全然分からないので

すから、成功しないのは当然です。

私は沖縄の生まれなので、沖縄から船に乗れないかと考えて沖縄へ行きました。そうしましたら、沖縄の新聞が「沖縄の青年、世界一周無銭旅行計画」と書いてくれて、社会面トップに載りました。すると沖縄のテレビが取り上げてくれたのです。

折しも沖縄から、南米ボリビアへの移民団を乗せていく船があり、その船が香港に立ち寄るといのです。私は香港経由でアメリカに行こうと思い交渉しましたら、香港までは無料で乗せてくれるということになりました。

香港へ向かった時は、ポケットに二十七ド

ルしか持っていませんでした。

始めて香港を見たときの感激は、一生忘れることができません。夜の十一時頃、「香港へ着いたよ」と起こされて、デッキに上がると、イルミネーションをつけた船、船、船。前も後も陸上も、輝くような街明かりで、明かりの波に囲まれていたのです。

どんどん運ばれてくる負傷兵を見たとき

沖縄を出発する前に、香港で仕事につけるという保証はなかったのですが、ただ、何とかなるだろうという持ち前の呑気さと、また、何としても頑張るぞという決意のよなものがありません。

貧乏旅行の不安が現実となったのはYMCAの部屋を借りた翌日からでした。紹介されていた知人から、また紹介を受けてというように、仕事を見つけて回ったのです。

どこか仕事を見つけないと宿泊料も払えません。仕事を見つけないことは、語学が堪能であるとか何か技術を身につけているとか特徴がない限りむずかしいのです。

幸い毎日新聞社の香港特派員の紹介で、海外旅行社の仕事をしている人のところで働くことになりました。

香港へ来た日本人観光客の案内をする観光ガイドのアシスタントです。

そのうちに香港ヒルトン・ホテルの二十七階に写真スタジオを持つているアメリカ人を紹介してくれる人がいて、会いに行きました。そこではUPIのテレビニュースをつくっていたのです。私は英語が話せないものですが、英語が堪能な友人の浮橋恒彦さんが一緒に手伝ってくれ、香港で撮影の仕事をしたという意向を伝えると、早速、テストをしようということになりました。

ちょうどその時、『スター誕生』のジュディ・ガーランドという女優が若い恋人と一緒に香港に来ているので、その様子をUPIにテレビニュースで送りたいから、撮ってくれといわれて、カメラを借りて取材をして、それを一分間位のニュースにまとめると、「明日から来てほしい」と言われました。

それから、ファーカス・スタジオで、アメリカ人、オーストラリア人、中国人と一緒に仕事が始まったのです。私はムーヴィ・カメラの撮影が専門で、コマ・シヤル・フォートの撮影助手をしたり、英語を教えてもらったりしました。英語の世界ですから自然に英語には慣れました。

八月に「トンキン湾事件」が起きました。私は当時マカオでドキュメンタリーの撮影をしていたのですが、ボスがすぐに戻って来い



世界一周無銭旅行の途中、たまたまベトナムへと石川氏



ベトナム戦争、岡村昭彦を知らない世代も熱心に聞き入っていた

というので、急いで香港に戻り、それまでの仕事の整理をして、ベトナム行ききの準備を始めました。ビザを取り、カメラのテストをし、取材の準備をした。

その仕事は、香港に極東総支局を置くドイツ第二テレビの仕事で、支局長のカール・ワイスと私のポスのマービン・ファーカーズと私と三人で行くことになりました。

「トンキン湾事件」は、当時としては大ニ

ユースですから、ベトナムには世界中からジャーナリストが大ぜい来ていました。

サイゴン周辺での、トンキン湾事件の反響の取材が主でした。のちに『ニューヨーク・タイムス』による米国防総省の秘密文書の暴露で、トンキン湾事件は米国の陰謀だったということがわかるのですが、もちろん取材したサイゴンの米軍将校たちも、当時、知るよしもなかったし、私たちも彼らの話を聞きながらカメラを回し続けていたのです。

そのあと、もう一回ベトナムへ行きます。一九六四年十月、ニューヨーク教育テレビの仕事で、再びサイゴンへ飛び、今度はベトナムだけでなく、タイとカンボジアの国境へも行ったのです。この取材では、初めて米軍のヘリコプターに乗って、メコンデルタ近くの村へ飛び、村を警戒している兵士たちの姿を見ました。そして軍病院へ行きました。

どんどん負傷した兵士が運ばれてくるんです。負傷した兵士を見て、初めて実感として、戦争というものに触れた思いがしました。

その時、サイゴンで岡村さんにお会いしました。短期間だったのですが、岡村さんとはゆっくり話をしたり、一緒に酒を飲んだりということはありませんでした。

ベトナムから香港へ帰ってきてても、ベトナムで行われつつある戦争がどんなものか、まだ私には分かりませんでした。私は香港でお

金を貯めたら、タイへ行き、最終的にはアメリカへ行くこうと思っていました。

八カ月の香港生活に別れを告げて

二回目のベトナム取材が終わって香港に帰ると、まずそれまで勤務していたファーカー・スタジオを辞めました。

なぜ辞めたのかというと、その頃NHKの香港支局長が交代したので、香港にいる間に温めていた二つの企画を持ち込んだのです。一つは、香港の蛋民（たんみん）の生活をドキュメンタリーにするというものです。香港の水上生活者は多いのです。蛋民はふだんは船の上で生活しています。結婚式も水の上なんです。その生命力あふれる生活の様子を撮影すること。もう一つはマカオで二十年間、難民救済活動をしているポルトガルの神父を、一本の作品にまとめるというものです。「ぜひやりましょう」ということになりました。

このドキュメンタリーは一九六四年に、NHKで、二本とも特派員報告ということで放送されました。

その企画料と撮影料をもらって、このお金があれば、そのまま飛行機に乗ってアメリカへ行くこともできたのですが、撮影機を買い、その撮影機をもってベトナムに出発することになるのです。これが私の大きな転機になっ

たことは言うまでもありません。

岡村さんの前線での活躍ぶりを取材

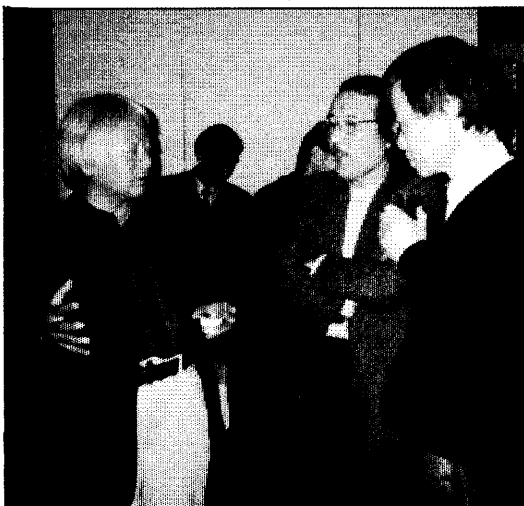
一九六五年一月七日、香港での八カ月間の生活を終え、サイゴンへ移りました。そこで岡村さんに再会し、南ベトナム政府軍に従軍する岡村さんの前線での姿をテレビカメラに



挨拶する昭彦長女の純子さん



スライド説明中の中川道夫氏



パーティで歓談中の石川氏、岡村春彦氏(中)、加清鍾氏

収めたのです。このドキュメンタリーは、日本の12チャンネルで放送されたのですが、ベトナムにいた私は見ておりません。

その後、日本テレビから四名のスタッフが「ノンフィクション劇場」取材のためにサイゴンに来て、私ともう一人が、現地参加としてスタッフの一員になりました。計六人で三班つくり、三十分番組を三本つくりとスタートしたんです。そして、中部ビンディン省で作戦している南ベトナム海兵隊に約一カ月従軍取材をしました。それが「南ベトナム海兵大隊戦記」というドキュメンタリーで、私の撮影した第一作が一九六五年五月九日に、日本テレビで放送され、大問題となりました。

当時の佐藤内閣の官房長官の橋本登美三郎氏から「ひどい」という電話が日本テレビの社長のところに入ったそうです。映像の中で指を切り落とされた捕虜の場面、もう一つは違う捕虜ですが、首を切り落とすところがあったんです。

南ベトナム政府軍はアメリカがつくった軍隊です。日本政府はアメリカを支援していたのですから、事実であってもマイナスイメージになるのはまずいというので、一回だけの放送で打ち切りになりました。

すべて私が撮影したフィルムですけど、作品はテレビ会社のもので、私の作品とはならないのです。版權も何もないのです。

そのことがきっかけで、テレビは止めて、スチール写真を撮るようになりました。

ただ実際にフリーのカメラマンになると、スポンサーがいらないので苦労しました。ネガをUPIに売ったりもしました。

岡村さんのテレビドキュメンタリーを撮影したのが、三月から四月にかけてでしたが、その後、日本テレビの取材をしている頃、岡村さんは解放戦線に入っていたのです。日本テレビの取材を終えて、私がサイゴンに戻ってきたときには岡村さんはもう帰って来ていました。

今日これからお見せするスライドは、その後撮った写真です。

(1) メコンデルタの戦闘状態

(2) 海兵隊のアドバイザー(軍事顧問)

(3) 捕まった捕虜

など、石川さんが撮影した百枚あまりのスライド写真を説明しながら、戦争の悲惨さ、むごさを、静かに語ってくださいました。次はその中で印象に残った言葉です。

「従軍しているときは兵士といっしょに寝て、いっしょに食事をします。いままで笑いながら話し合っていた仲間が、一瞬のうちに冷たい物体になってしまうのを、いやと言うほど見せられ、戦場の恐ろしさ、命のはかなさを身にしみて感じました」。

専断局便り

1 講師 石川文洋（いしかわ・ぶんよう）氏
について

▼一九三八年、沖縄首里（現那覇市）生まれ。父親の仕事で本土へ転居。両国高校卒業後、毎日映画社へ入社。六〇年安保闘争などを取材。

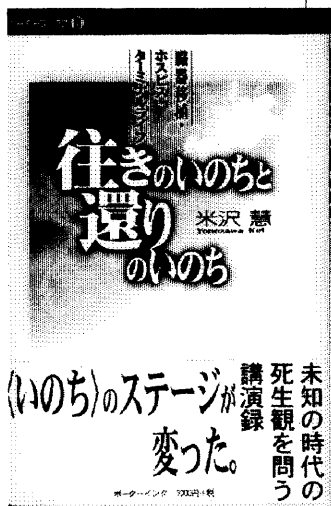
▼一九六四年、アメリカ渡航のため無銭旅行で香港へ。ファーカス・スタジオ入社。トンキン湾事件でニュース映画カメラマンとして初めてサイゴンへ行く。フリーになりNHKの仕事で香港やマカオの取材をする。サイゴンで岡村昭彦と出会う。

▼一九六五年、サイゴンに居を移す。南ベトナム軍に従軍する岡村昭彦のテレビドキュメンタリーを撮影。日本テレビ『南ベトナム海兵大隊戦記』の撮影を担当するが1回目の放映後、中止事件が起こる。その後、スチールカメラマンに転身して各地で従軍取材。

▼一九六九年、2・4沖縄ゼネストの取材を機に朝日新聞社出版局写真部に入社。カンボジア内戦、ラオス、統一ベトナム、北朝鮮などを取材する。

▼一九八四年、朝日新聞社を退社。再びフリーランスに。現在、長野県諏訪市に在住。

■『ベトナム最前線』『これがベトナム戦争だ』『戦争と民衆』『戦場カメラマン』『大虐殺』『アンコールワット』『写真記録ベトナム戦争』など著作多数。



2 『往きのいのちと還りのいのち』（米沢 慧）

著・ポーターインク刊、定価一〇〇〇円税別）AKIHIKOゼミの主宰でもある著者が、一九九七年から三年にわたって語った講演集である。氏はいのちを「往き」と「還り」と分ける。また、死に「いのち」とルビをふる。死生観を問う一冊。友人・知人へお勧めください。

3 『北へ：異色人物伝』（北海道新聞社編・定価千四百円税別）本書は一九九九年七月から北海道新聞日曜版一、二面に連載中のものをまとめたもので、岡村昭彦も取り上げられています。

4 シンポジウム「印刷業の人権と岡村昭彦」

二月十九日千葉県佐倉市で開催された「第二回ちば人権展」のシンポジウムで、かつて被差別部落で「岡村さんに命を救われた」「神様か、仏様のように思っております」という女性二名もパネラーに加わって発言した。

5 「夏期特別セミナー」を、今年も八月十八、二十日にかけて開催します。本年は長野県小布施町オープンハウス「しなのぐらし」。奥志賀高原に連なる標高一三〇〇メートルの力ヤノ平・ブナの原生林自然学校。そして恒例となった軽井沢の岩城邸を会場に開きます。

▼どなたでも参加できます。希望者は七月二十五日まで事務局へ。（費用二泊三日、二万五千円交通費別）

6 「AKIHIKOの会」の活動は、毎年岡村昭彦の命日（三月二十四日）の前後に、年一回の「AKIHIKOの会」を開催。そのほか不定期に会報の発行をしています。会費、会則、会長なし。通信費一〇〇〇円を払った人を会員として登録。「AKIHIKOの会」などのお知らせや会報をお送りしています。

7 通信費の送金先は左記の通りです。
口座番号「〇〇一七〇一六一五二二三」
加入者名「岡村昭彦の会」

■「岡村昭彦の会」会報 第十一号
発行 東京都江戸川区西小岩五十一―二七七 戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局

TEL&FAX 〇三―三六五七―八三三〇